

喜多・城山城跡の構造変遷と帯曲輪

山上雅弘

1 はじめに

喜多・城山城跡は平成27年度に県道改良工事に伴って発掘調査が行われ、城跡全体の80%が調査された。本稿ではこの城跡が部分的な改修を行いながら構造変遷を行ったことを確認しながら、この変遷の城郭史における意義について考察したい。

2 山城の立地と構造

この城は播磨の内陸部、丹波との国境近くに位置するが、現在の地名では兵庫県西脇市黒田庄町喜多に所在し、中世には黒田荘に属した。城の立地は加古川東岸の岡集落北側にある標高114.2m、比高30～35mの独立丘陵上にあたる。この丘陵は南北約120m、東西100m程の規模で平面形状は楕円形に近いが、現状は東側と北側が裾部を削られ変形する。丘陵斜面は南側が崖地形に近い急傾斜で、他の三方も南側ほどではないが急傾斜となる。東側には北東へ続く尾根がかつて伸びていたといわれるが、現在は削平されている。一方、山頂からの眺望は比高のわりには良好で加古川上流域の盆地を一望することができる⁽¹⁾。

この城は後述するとおり3時期⁽²⁾の変遷を経るが、最終的な構造は山頂を主郭とし、西側に小規模な第Ⅱ郭、東側に第Ⅲ郭をもつ。ただし主郭・第Ⅱ郭は山頂にあった山上講信仰による改変を受けており、特に第Ⅱ郭は西辺の縁部が不定形となる。一方、第Ⅲ郭は曲輪周囲の北・東辺に土塁を構築する。土塁の規模は北辺が高さ0.9m、基底部幅2.8m、馬踏幅1～1.8mで、東側ではかなり規模を減じており、東辺ではさらに南に向かって低くなる。東尾根筋から第Ⅲ郭・主郭南側を回り込んで第Ⅱ郭に通じる城道が造成によって構築され第Ⅲ郭への入口には石段が設けられる。この他、北側には斜面中位に帯曲輪となる第Ⅵ郭が設けられる。



第1図 城跡全景（南上空から）

ただし、調査は西側の一部が未調査で、ここには第Ⅳ郭より一段上がってやはり帯曲輪があり、第Ⅱ郭（図には未掲載）を守るように西面を囲んでいる。いずれにしても主郭を中心とし、これに付随する小郭で構成される山城で、基本的には単郭構造と評価できるだろう。

出土遺物は各曲輪から出土しており、山城としては比較的豊富といえる。土器類では土器器皿・鍋・東播系須恵器鉢・瓦質播鉢、陶器類では古瀬戸平碗・同天目碗・中国産青白磁（獣足など）などがある。このほか土錘が212点以上、石製品として石鍋・基石・砥石が出土している。

一方、当城では金属製品が多く出土しており

銅製品では銭貨・刀装具・甲冑関連部品（座金具など）・馬具（鞍など）・唐櫃の飾り金具、鉄製品では横手急須形鉄製品・釘・鎌などのほか、武器（鉄刀・鉄鏃）、武具（甲冑）などがある。特に武器・武具関係のものが多く含まれる点が特筆される。ただし、甲冑は飾り金具や籠手の部材などの破片が出土するもののまとまった形での出土はなかった。

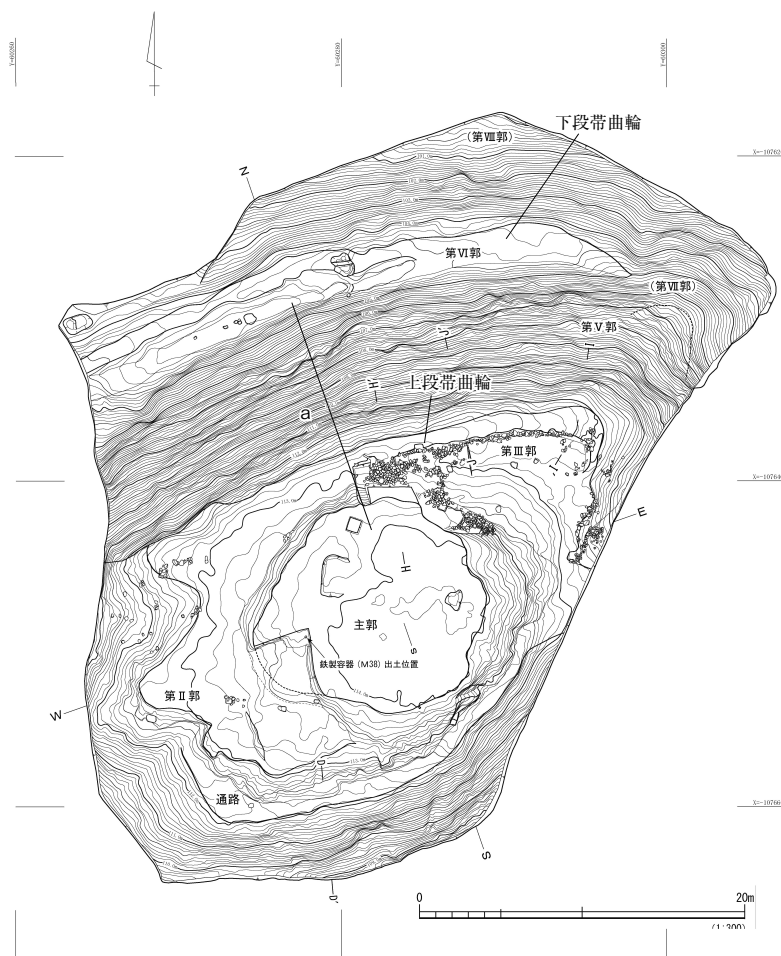
陶磁器類は組成に偏りが見られる。例えば陶器は瀬戸焼以外のものが含まれない。その上、当地は丹波焼の生産地に隣接するが丹波焼は出土していない。唯一、丹波焼模倣製品である瓦質擂鉢（一本挽きの卸目）が出土するのみである。磁器についても獣足や装飾が施された青白磁があるものの碗や皿といった食器の一般的な器種がない。この他では古瀬戸の平碗と天目碗がわずかに出土する。土師器では京都系技法のものが少なく、中皿がない。煮炊具も量的にはわずかである。

その一方で手づくねの土師器小皿（在地産が大半を占める）と土錘が多く出土する。土師器皿・土錘が多い事例は朝日中郷城跡（豊岡市中郷、豊岡市教委2002）に共通するが、同城も出土遺物の組成に偏りがみられ陶磁器が少ない特徴を持つ。以上から見るとこの城は駐屯兵の階層があまり高くないことが推測されている。

さらに、土器・陶磁器類についても各曲輪に散布する状況や、武器・武具について破片が多い点などを見ると、当城において非日常的な混乱状態（戦闘状態？）が生じた可能性が想定される。

一方、これらの遺物の時期は古瀬戸が15世紀前半頃、青白磁からは14～15世紀、さらに東播系須恵器

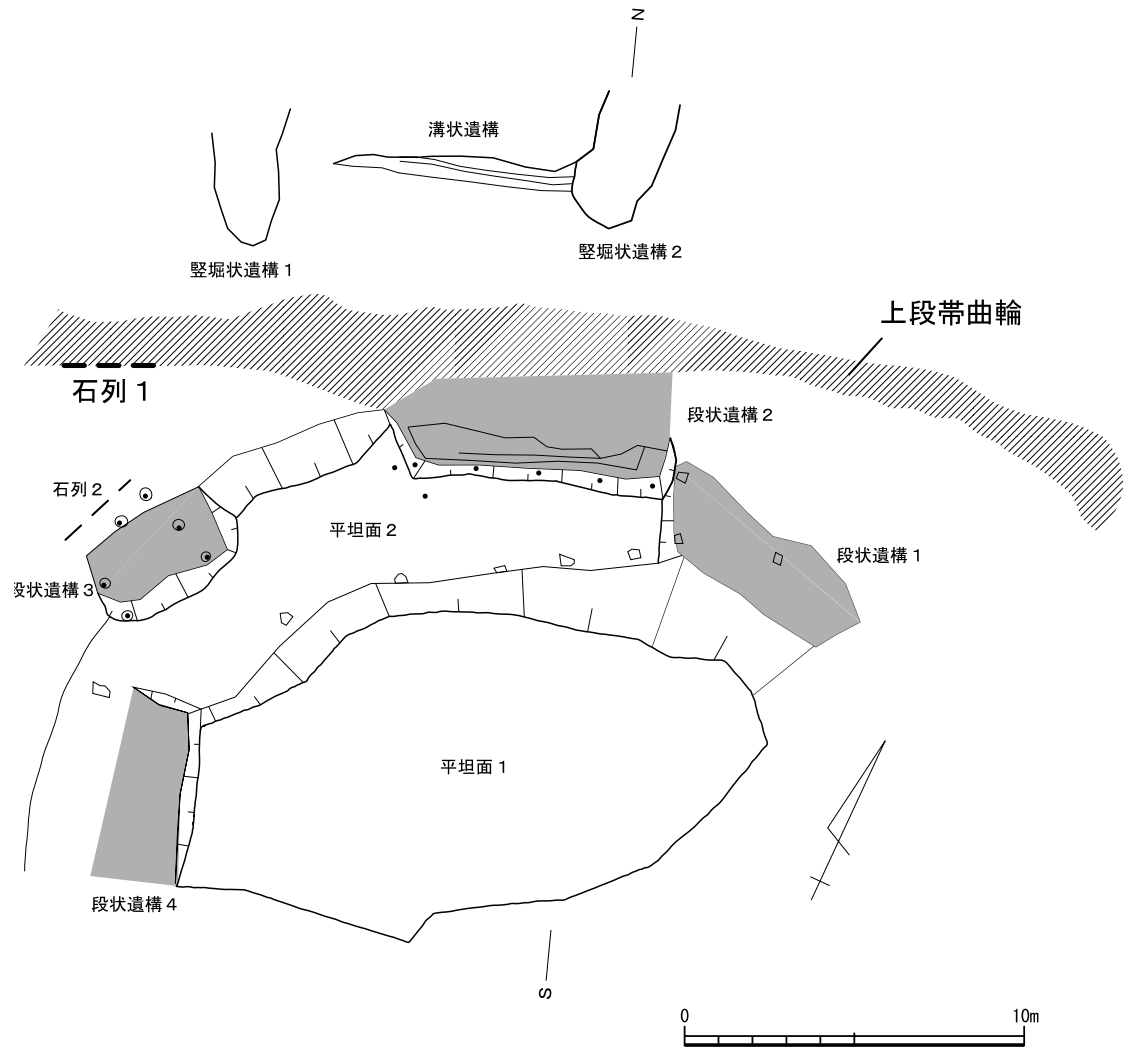
鉢は15世紀前半までとされる。つまり城跡の機能した時期は15世紀を中心とするものと考えられる。ただ、こういった遺物群のなかで出土位置を明確にできるものは大半が盛土層より下層であることから、多くの遺物は最終遺構面に伴うものではないと考えられている。つまり遺物が示す時期よりも山城の存続時期は長い可能性がある。最終時期の遺構に伴う遺物が出土しない事実は、その時期の駐屯の形態が変質したことを示すが、こういった遺物の状況からするなら多くの場合、戦国時代後半期の可能性がある。



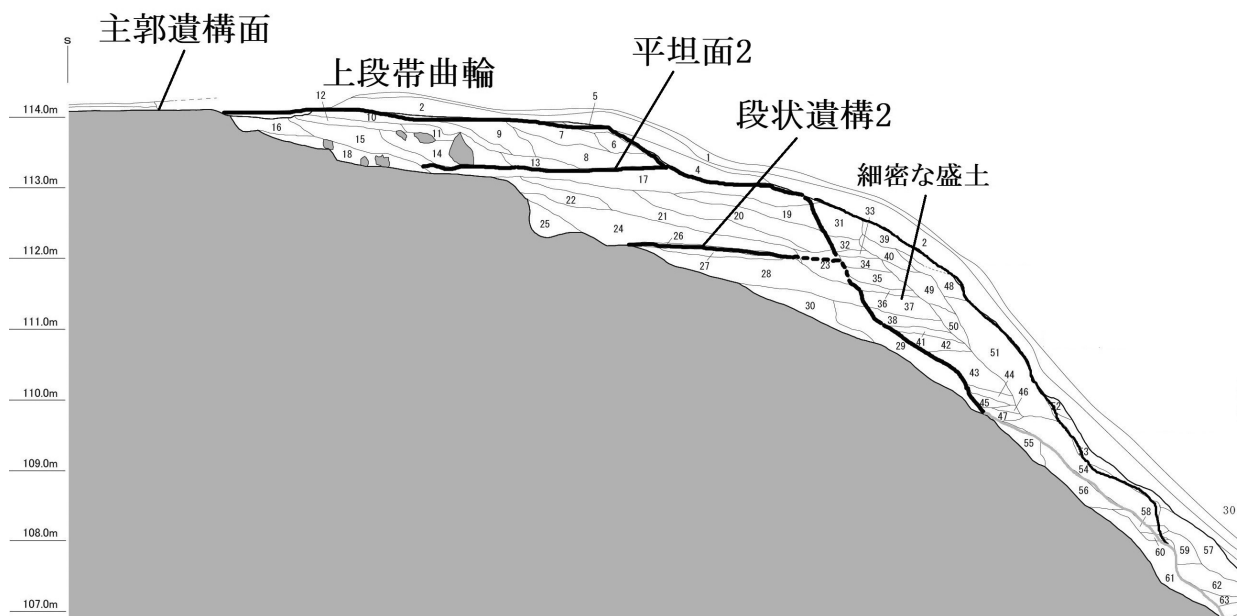
第2図 全体図

3 山城の防禦施設

当城の防禦施設として最も重要なのは2段の帯曲輪である。上段の帯曲輪は第II郭北縁部から第III郭土塁上端面（馬踏み）へ続く平



第3図 下層遺構概念図



第4図 上段帯曲輪断面図 (a)

坦面で、下段は第Ⅵ郭がそれにあたる。これらは北側の山裾に向けた二段の攻撃拠点（この場合、射撃する足がかりとなる場所なので本稿では射撃点と呼称する）としての役割を果たす。

第Ⅵ郭についてはその位置と構造から明らかに山裾への射撃点として機能したことがわかる。一方、やや構造的には見えにくい第Ⅱ郭北縁部から第Ⅲ郭土塁上端面へ続く平坦面についても第Ⅵ郭を援護あるいは最後の防衛拠点（射撃点）として機能する場所と考えていいだろう。この平坦面は第Ⅲ郭側が幅1～1.5mほどの通路状であるが、この平坦面は第Ⅱ郭の北縁の平坦面へと続き一体となった構造を持つ。そして、第Ⅱ郭側西端縁部で石列1が北向きに積まれ、第Ⅱ郭（城内）側を表面（おもてづら）にする。このことから石列は平坦面（図の網掛け部分）縁部を補強した土留であることがわかる。つまりこの状況から見るとこの郭北縁は第Ⅱ郭から独立して、あくまで射撃点としての機能を果たす帯曲輪として整備されていることがわかる。一方、第Ⅲ郭土塁上端面は構造的に一定の形状を保っており、凹凸や明確な崩落痕跡は見当たらない。このため土塁の幅は第Ⅲ郭側で0.9mと狭くなるものの、第Ⅱ郭側との高低差がなく接合しており、第Ⅱ郭から第Ⅲ郭にかけて横移動が可能な構造をもつ。従って第Ⅲ郭の土塁状地形は第Ⅲ郭の土塁構造（防弾・防壁）であると共に上端が麓への射撃点となり、第Ⅱ郭側平坦面から連続する帯曲輪と評価できる。

さらにこの平坦面・土塁上端面は下段帯曲輪に平行して設けられ、斜面下に対して視野が効く構造でもある。以上の事から考えると第Ⅵ郭同様、斜面下に対して防御のための射撃機能を果たす曲輪であることは疑いがない。以上のことから本稿ではこれらが防禦構造を示す意味から、必要に応じて第Ⅵ郭を下段帯曲輪、第Ⅱ郭北縁部から第Ⅲ郭土塁上端面の通路状の平坦面を上段帯曲輪と呼称する。

ただし、こういった射撃点は北側のみに厳重で、その他の方向に対しては西側に帯曲輪をもつ程度で（調査区外）大半が急峻な斜面地形に頼っている。つまり当城の縄張りは北側に向けて防禦に力点が集中する。

従って、外形的には南の岡集落を防衛する意識が強く働いた城郭であると見ることができる。ただし、この点に関しては周辺集落との関係性に不明な点が多いので、結論は後考への課題としたい。本稿ではあくまで喜多・城山城跡の構造変遷の持つ城郭史における意味を考えたい。

4 城郭の変遷

城跡全域に渡って改修痕跡を明らかにすることはできないが、第Ⅱ曲輪北側および第Ⅵ郭を含む北側斜面では数度にわたる改修の過程が確認できた。先ずその変遷を第3図の城跡南北土層断面および中央部北半土層断面、および第2図平面図を使って紹介する⁽²⁾。

この山城の第1段階は北斜面に堅堀（平面図、堅堀状遺構1・2）を構築し、山頂の北側縁部に段状遺構2（断面図26層が表土、27層が貼床と整地土、28～30層が基盤造成土）を構築する。おそらくこの時点で周囲の段状遺構も構築された可能性が高い。

次の第2段階ではこの段状遺構2が埋められ平坦面2が構築される。（断面図17・19～25層によって埋め立てられる）この時、前方切岸の下半の掘削および上端部での造成が行われる。この造成時に段状遺構前面の細密な盛土が行われるが（断面図31～51層）、これは段状遺構前面の切岸を急勾配にする目的で積まれたものと判断される。（ただし、段状遺構前面は盛土作業のために削平を受けた可能性が高い）これは北斜面がやや緩い傾斜であったため、第1段階では堅堀を構築して敵の移動障壁としたが、斜面全体を造成して切岸の傾斜を急角度にすることで、より防禦の効果を高めたのであろう。一方、こ

の切岸の造成によって第1段階の堅堀は下半が削平され、上半の図の範囲のみが造成土の下になって埋没した。同時に斜面中段に第Ⅵ郭（山頂側背面の斜面裾部を掘削し前方に盛り出して造成）が切岸によって削平された土砂を使って構築される。

最終段階となる第3段階で段状遺構（1・3・4）・平坦面2が造成によって埋没し（5～16・18層）、主郭が北側に拡張され、その前方が一段低く通路状の構造となり上段帯曲輪が構築される。一方、第Ⅶ郭（下段帯曲輪）はそのまま継続して機能する。以上が山城北側の調査成果から読み取れるこの城の変遷過程である。



第5図 麓から望んだ城跡（南から）

5 造成の痕跡

以上、城跡の北側を中心に変遷を見てきたが、北側以外の地点でもいくつかの造成箇所や変遷が読み取れるので、主なものについて紹介しておきたい。

①主郭内部は最終段階で削平を受け平坦化が計られるが建物などの遺構が検出されなかった。主郭は中央部を削平する一方、北側や東面については、この削平土を盛土し曲輪面を拡張する。この盛土には15末～16世紀前半の土器が大量に含まれるが、これらの土器は主郭の前段階に伴う土器群と考えられる。この土砂造成は平坦面2および第Ⅲ郭北西隅にも及ぶが、多くの礫と共に土師器皿・土鍾などが投げ込まれるものの、第Ⅲ郭北面の土塁構築以後の造成であると判断される。

②第Ⅱ郭は西側が土砂を盛土して構築するが、当初は緩傾斜の自然地形に段状遺構3・4等が点在する粗放な構造で、第Ⅱ段階で平坦面2が構築されると同時に内部の整備が行われる。ただし、平坦面2と第Ⅱ郭の区分は不明確。そして最終段階で主郭の整備に伴って段状遺構3・4が埋め立てられ、ようやく現状地形の第Ⅱ郭が形成される。

③第Ⅲ曲輪は北・東辺に土塁が構築されるが、この土塁構築は第2郭北端とのつながりから、前述のとおり第3段階のものである。また、前述の主郭の曲輪面拡張に伴う造成以前に段状遺構1が存在した。第Ⅲ郭の内部は自然の傾斜が残されるが、土塁の構築時期から第3段階でこのような構造になったと判断される。ただ、内部の平坦化には消極的であることからみると、この曲輪は下層の城兵の駐屯空間として機能した可能性が高い。なお、前段階では段状遺構1があったが、この曲輪も第Ⅱ郭同様、当初および第2段階までは自然地形が残る粗放な構造であった可能性が高い。この意味で第3段階での土塁構築に伴う曲輪の整備は段状遺構を集約したことによる駐屯場所の確保が目的であったと思われる。なお、曲輪内部には建物の復元には至らなかったが礎石が数石検出されている。

以上の調査成果を3段階の変遷で整理すると①主郭の削平による曲輪面の造成は第3段階の後半、②段状遺構2が埋め立てられ第3段階で上段帯曲輪が構築される、③第Ⅲ郭が現状の構造になるのも第3段階である。つまり第2曲輪北側・第Ⅵ郭の周辺を除くと1・2段階の山頂域は自然地形を残したままで粗放な構造であった可能性が高い。そして第3段階に大きな改修が行われたが、それは主郭および第Ⅱ・Ⅲ郭の郭面造成と上段帯曲輪の構築が主なものであった。この城の各段階の構造をまとめると、主郭を中心に段状遺構などが点在した第1段階（つまり築城段階）、引き続いて山頂にいくつかの段状遺

構が維持されるものの、山頂域が主郭および平坦面2に集約され、下段帯曲輪が登場した第2段階、最後は山頂北側に上段帯曲輪が構築され2段の帯曲輪が防禦の要として整備された第3段階（最終段階）、これに主郭東側が拡張された段階へと変遷したとまとめることができる。これらの変遷を通観すると当城は粗放な駐屯施設のみの構造から、実戦に即し段階を経て射撃点を整備し、一定の構造を持った城郭へと発展した姿が見えてくる。



第6図 二段の帯曲輪（北から）

6 二段の帯曲輪

次に、防禦施設の発展過程について二段の帯曲輪の構築意図を検討する。下段帯曲輪は城域の北・西面を覆い、山麓からは比高差約20mに位置しており、山頂域の比高差30mに比べ、適度に近接して敵への射撃が可能となる場所である。つまり射撃の効果を高めるためには攻撃地点から遠ざかりすぎても問題となるし、敵の移動に迅速に対応するためには、横移動できる平坦地が機動的である。下段帯曲輪はまさにこれに適合しているといえるだろう。このようにみると第Ⅱ段階になって下段帯曲輪が構築されたのは、実戦を通した経験から考え出された可能性が高いのではないだろうか。

さらに戦いの経験を経る中でより効率的に敵を攻撃するために射撃点に重層的な重なりを持たせる工夫が生まれる。つまり、最終段階の上段帯曲輪の構築である。これによって敵は視線を上・下同時に見張らなければならない状況に追い込まれる。当城の最終段階はこの効果を狙ったものと判断される。

もう少し2つの腰曲輪の効果について述べると、下段帯曲輪は麓からの比高差約20mの所に構築され、十分弓矢などの射程内に北面の全域をカバーできる上、山裾に死角が出来ない位置にある。このため直接麓に取り付いた敵兵を狙うには都合がよい。これに比べると麓までの比高差が30mに達する上段帯曲輪では距離が遠くなることと斜面の張り出しに妨げられ、山裾が直接視認できない死角が生じてしまう。つまり直接的に対峙するには下段帯曲輪が有利となる。しかし、敵の全体を俯瞰したり、敵の射撃をかわしたりする上では上段帯曲輪の位置が有利となる。この意味でも両者の存在は敵への重層的な射撃が可能となり防御がより強力となる工夫といえるだろう。

以上からみると喜多・城山城跡では山頂域が駐屯・居所機能、見張り機能・防禦機能の3要素が混在し、未成形の曲輪から徐々に統合・整理が行われ、山頂北側から斜面に防禦機能が特化した構造へと発展したと評価できる。

7 石垣

もう1つの喜多・城山城跡の特徴として、第Ⅲ曲輪土塁（上段帯曲輪の城内側法面）内面に地山石材を使った石垣がある。この石垣は主として角礫でグリ石は持たず、面は空隙が多く、技法的には稚拙な印象を受けるものである。石材は目視観察の限りでは岩盤を削平した際に主郭周辺や、第Ⅲ郭、北側斜面などから供給されたものと思われる。興味深いのは石垣が土塁内壁にのみ構築され、外壁には構築されない点である。これは城壁の防禦や見せることを意識した戦国時代末期から織豊期にかけての石垣とは性格が異なることを意味する。この城の石垣構築の目的は上段帯曲輪の法面を支える土留めにある。

しかし法面がほぼ90度に立ち上がる構造からは、狭い曲輪内部を有効に使うことも目的としていることが推定される。

同様の事例は中世城郭にしばしば認められる。例えば小田城跡（兵庫県小野市）主郭背後の土塁内面に石垣が構築されるがほぼ垂直である。西山城跡（高知県高岡郡中土佐町）では堀切に面した帯曲輪内面に石垣が築かれる。この城では堀切に面した腰曲輪を敵への射撃点とするが、土塁内壁を石垣によって城内側に垂直の壁を構築することで、身を隠しやすくする効果が期待できる。岡豊城跡（高知県南国市）でもⅢ曲輪の土塁内壁に石垣が構築され礎石建物の建物敷地を確保している。



第7図 第Ⅲ郭の石垣（西南から）

一方、備前・播磨東部は中世城郭の段階から城郭に石垣が導入される地域（中井均2002・乗岡実2016）とされ、ある種地域の先進性を示すもののように指摘される。当城の石垣構築は第3段階（最終段階）と考えられるが時期的には戦国時代後半段階以前と推定されるので、具体的な年代は明確に出来ないが石垣構築としては早期の事例といえるだろう。城の最終段階で主郭をはじめとする郭の平坦化が著しく進んだと考えられるが、この段階で始めて岩盤層の削平も進んだことが推測され、石材が豊富に供給された可能性が高い（山上2021）。つまり石垣構築はこの工事と表裏の関係にあったことが推測されるのである。つまり、喜多・城山城跡の石垣と造成工事は築城工事の増大が石垣構築を促した側面を見ることができる。石垣構築という技術の導入という導線過程ではなく造成規模の拡大による原初的な石垣の構築という過程を考える必要があるのだろう。

8 さいごに

以上、見てきたとおりであるが、筆者は喜多・城山城跡の防禦施設の発展、曲輪機能の変化は戦いの経験を経る中で新たな構造へと発展を遂げたと推測している。つまり、2段の帯曲輪の構築は実戦を経る中で、下段帯曲輪の構築に至ったと推測する。それまでであった堅堀を否定し、より切岸を急傾斜とし、かつ帯曲輪で被攻撃面となる北斜面全体を覆う構造への改変過程には、この地域独自の戦闘に即した経験がベースになっている。そこには虎口や横矢構造といった従来の城郭研究に見られた指標とは異なる動向が確認できる。当城が15世紀後半から戦国時代後半に機能したことを考えると、戦国時代末期以前の城郭史を理解する上でこの事例は貴重な成果といえるのではないだろうか。今後の中世城郭研究は横矢・虎口といった戦国時代末期の視点から離れた要素についても、通時代的な視野から理解しなければならないことを示してくれているからである。

石垣構築については造成に伴って掘り出された石材の利用という視点からすると、石垣そのものの技術的な発展によって石垣が普及するという、これまでの研究動向では説明できない様相があるのではないと思われる。特にこの城の場合、見せることや城壁の構築を目的としないので、石垣は造成工事の延長での発想から生まれたものの可能性が高いだろう。造成工事が大規模になれば掘削土の中に石材が混入する確率も増すが、その場合に石材利用を考えることは自然な発想と言ってよい。喜多・城山城跡の場合、主郭の岩盤掘削や北側の切岸掘削などについて大規模な造成が行われていることが推測され

る。このことから石垣構築が生じることは、現場における原初的な発想として有りえるのではないだろうか。つまり、城郭における造成規模の増大と石垣などの石材利用は比例関係にあるという視点が、この事例からは指摘できるのである。中世城郭構築について喜多・城山城跡を見てきたが、発掘調査の微細な成果そのものから2つの視点を提示してみた。これらの視点はステレオタイプ化した視点を離れて、現場からの検討を通じて得られるものである。発掘現場の情報を基にした検討の重要性について、城郭研究は再確認する時期に来ているだろう。

【註】

- (1) 調査成果に関する内容は兵庫県教委2020から引用した。
- (2) 報告書では上層遺構・下層遺構として報告するもののうち、下層遺構を2段階に分けて検討した。さらに上段帯曲輪についても筆者の解釈であり、責は筆者にある。
- (3) この調査では下層遺構については面的な調査が十分に行われていないため、城域全体についての構造変遷の詳細は明確ではない。人工的造成が前提である中世山城では、加工・造成に伴う部分は調査の対象とすべきであり、今回のように下層に前段階の遺構が埋没する場合、当初の調査計画に反映すべきであった。このことのつけが下層遺構の検出に制約を加えてしまったのである。しかし、この一端は土木学的なアプローチについて十分な研究が行われてこなかった風潮にも大きな責任がある。例えば、それは文化庁が刊行した『発掘調査の手引き』の「－各種遺跡調査編－」第5章（P 189～232）において、築城前の地形と造成の関係が釜屋城跡の土塁断ち割り調査を使って説明されるが不十分なものでしかないことにも表れている。

【挿図出典】

挿図は総て兵庫県教育委員会2020『喜多・城山城跡』掲載図を一部改変したものである。

【引用・参考文献】

- 豊岡市教育委員会2002『中郷朝日遺跡群』
- (財) 高知県文化財団埋蔵文化財センター2008『西山城跡』
- 高知県教育委員会1990『岡豊城跡－第1～5次発掘調査報告書』
- 中井均2002「置塩城跡の石垣－播磨・備前地域の戦国期城郭からの検討－」『置塩城跡総合調査報告書』夢前町教委
- 乗岡実2016「構築技術からみた織豊系城郭の石垣の成立」『織豊城郭』第16号
- 兵庫県教育委員会2020『喜多・城山城跡』
- 岸本一宏・別府洋二ほか2020「512冊 喜多・城山城跡」兵庫県教育委員会
- 山上雅弘2020「第4節 喜多・城山城跡における段状遺構」『喜多・城山城跡』兵庫県教育委員会
- 山上雅弘2021「山城調査における造成と土木量計算（その2）」『中井均先生退官記念論集』